

# 接触場面の日本語会話に関する非対称性研究の批判的概観

藤平 真由美<sup>†</sup>

ミレニアム以降、接触場面の日本語会話における非対称性を論じた研究が現れているが、「非対称性」そのものをはじめ概念の統一性が確立されておらず、フォーカスされる会話の次元もまちまちなため、整理が必要である。また、様々な調査もなされているが、目的意識が異なり、データが活かしきれていない憾みもある。会話参加のあり方の分析方法を探索しつつ、会話を通して構築される関係性総体も考察する方法論を批判的に検討した。

## A Critical Examination of Studies Focusing on Asymmetries in Japanese Conversations in Contact Situations

Mayumi Fujihira

Since the turn of the millennium, studies on asymmetries in Japanese conversations within contact situations have become more prominent in academic literature. However, there is still little consensus on the definition of the term "asymmetry," or on the concept itself. Furthermore, the specific dimensions of conversation that these studies focus on remain poorly defined, underscoring the need for systematic organization of the data. Although numerous surveys have been conducted, their divergent objectives have hindered the comprehensive utilization of their findings. This paper critically examines methodologies for analyzing conversational structures, while also exploring the broader relationships constructed through such interactions.

### 1. はじめに

2000年代以降、日本語教育の研究分野において、母語話者（以下、NSと記す）と非母語話者（以下、NNS）<sup>1)</sup>が会話を行う接触場面（ネウストプニー 1995）<sup>2)</sup>に関する非対称性の研究が盛んになった。岩田（2005）は、NSとNNSの会話参加のあり方の対称性および非対称性は両者の協同構築で行われると述べ、また会話の非対称性に関する代表的な研究であるLinell & Luckman（1991）の非対称性の定義を援用しつつ、会話の局所レベルでの発話連鎖が織りなす全体的な様相を動的に捉える必要があると指摘した。嶋原（2019）も、接触場面の話題展開における会話参加者の参加形式の対称性と非対称性に関し、Linell & Luckmann（1991）の定義を参考に分析した。こうしたことを考えると、Linell & Luckmann（1991）は非対称性を定義しただけでなく、以降の会話に関する非対称性研究に

大きな影響を与えたと言えるだろう。

そこで、本稿では、Linell & Luckmann（1991）以降の主な接触場面の非対称性研究を概観し、それらの研究が着目しているNSとNNSの会話参加のあり方と、会話において構築される両者の関係性などの会話に関する非対称性の整理を試みる。その上で、接触場面の非対称性研究の問題点と今後の可能性について検討する。この観点は、日本に在留し生活をするNNSの社会参加に際して問題となり得るNNSとNSの関係性を考える上でも重要となろう。そうした意味で、接触場面の非対称性を検討することは、多文化共生社会のあり方を考える上でも意義あるものと思われる。

なお、日本語教育分野では、文化差や学習者の特性を検討する一環で「NSとNNSの非対称性」を取り上げているものが見られるが、本稿では、基本的にはそうした「NSとNNSの非対称性」については扱わず、NSとNNSの会話参加のあり方と両者の関係性に関するものを対象とする。

<sup>†</sup> 博士後期課程在籍中（人文学プログラム）、大学院教育支援者

<sup>1)</sup> 本稿における母語話者とは、日本の文化内で日本語を第一言語として成長した者を指し、一方非母語話者とは、日本語が第一言語ではなく他の文化内で成長した者を想定している。もちろん、2つ以上の言語を同等に扱う能力がある者も考えられるが、本稿では便宜上、このように規定する。

<sup>2)</sup> ネウストプニー（1995:216-218）によると、接触場面とは、2つ以上の異なる文化が接触し他の言語や文化の成員とコミュニケーションを行う場面である。これを踏まえ、本稿では日本語による母語話者と非母語話者間会話場面のことを接触場面として扱うことにする。

また、本稿で扱う接触場面は、NSとNNSが基本的に日本語で会話しているものに焦点を当てて論じる。

## 2. 日本語学習者である在留NNSの増加とそれに伴う日本語教育の変化

日本語教育分野で接触場面の非対称性が注目されてきた背景としては、一つには1980年代以降、国際結婚に伴う在留NNSの増加に伴って、学習者であるNNSに対しての日本語教育環境や方針の変化があったことが挙げられ、また一つには、学習者と社会との関わりにも注目されるようになったことが挙げられる。1990年に入国管理法が改正され、日本での単純労働目的で中南米各国から多数の日系人が来日し、彼らの日本語学習支援<sup>3)</sup>を地域のボランティアが担った。そうした日本語教室において、本来は対等な関係性であると考えられるボランティアNSと学習者NNSの間に、「教える—教えられる」という非対称的關係が構築される問題が数多く指摘されたため、両者の対称的關係と多文化共生を目指した交流等の活動が模索されてきた(杉原 2003, Ohri 2003など)。一方、第二言語習得研究分野においては、嶋津(2006)によると、1980年代以前は、学習者に効果的に目標言語を教授する教授法および活動の普及に焦点が当てられていたが、1990年代以降、ポスト構造主義や社会構築主義などの影響から、学習者の主体性と彼らの“社会におけるアイデンティティ構築”に関する研究が多く行われるようになったと説明されている。そうした日本語教育現場での活動模索および従来の受動的学習者観から主体的学習者観へのパラダイムシフトを受けて、日本の社会と関わる「社会的な存在」としてのNNS<sup>4)</sup>や、多文化共生<sup>5)</sup>に関心が持たれるようになってきたことも、接触場面の非対称性が注目されている要因だと考えられる。

## 3. 接触場面に関する非対称性の研究概観と課題

### 3.1 接触場面の非対称性とは

接触場面の会話における非対称性とは何を意味するのだろうか。会話参加のあり方や会話参加者間に構築される関係性を考える際、例えば、丁寧体や普通体などのスピーチ

レベル<sup>6)</sup>の選択や、また何をどのくらい話すかという話題選択や発話量など、様々な次元に非対称性が存在するだろう。そのように考えると、接触場面会話の非対称性に関係する次元がいくつか存在すると仮定できる。そこで、本節では、そうした次元の整理を試みながら、会話における非対称性に関する先行研究を概観する。なお、非対称性に関係する各次元の論考は次節に記す。

まず、会話における非対称性を分析した主要な論文であるLinell & Luckmann (1991:7)は、対話を検討する際の前提として、そもそも非対称性は対話における普遍的な特性であり、本質的な特徴だと指摘している。対話は会話参加者間の知識の非対称性が前提としてあるので、会話参加者間で知識を共通にしようとする動きこそがコミュニケーションそのものであると述べ、話し手と聞き手間には根源的な非対称性が存在すると提起している(Linell & Luckmann 1991:7)。その上で彼らは、非対称性という概念は様々な意味に解釈でき、むしろ、様々な現象を包括する概念であるという見解を示している。つまり、非対称性とは「対話のプロセスにおける様々な種類の不等価性(inequivalences)を指す一般的な用語(筆者訳)」であり、その非対称性は、ローカルすなわち単一の発話およびターンや、グローバルすなわち長い対話区間の両方に存在すると説明している(Linell & Luckmann 1991:4, Linell 1990:172)。また、この非対称性はコミュニケーションの成功や不成功に関して中立的な概念であり、非対称性が存在するために会話に問題が生じるということではないともいう(Linell & Luckmann 1991:8)。したがって、会話における非対称性とは、会話のプロセスの様々な次元に存在する不等価性という中立的かつ包括的概念ということである。ただし、ここで一言加えておくとすれば、Linell & Luckmann (1991)とLinell (1990)の定義や立場は、接触場面の先行研究が取り上げている「非対称性」とは見ている次元や側面が異なっていると思われるため、単純にそれらと同列に扱えるものではないことに注意したい。

Linell (1990)およびLinell & Luckmann (1991)の非対称性の定義を援用した研究である岩田(2005)は、留学生NNSと日本人学生NSの接触場面における会話参加の様相を、協同構築のプロセスに注目し検討した。そして、会話参加の対称性と非対称性を分析するためには発話連鎖

<sup>3)</sup> 地域市民ボランティアによる日本語教室では、当初、「日本語教育」という用語が多く使用されていた。しかし、市民同士であるボランティアと学習者間には教師を想起させる「教育」ではなく、「学習支援」という概念が適切ではないかという問題から、次第に「学習支援」という名称が普及したと言われている。

<sup>4)</sup> 「日本語教育の参照枠報告」(令和3年10月)では、言語教育観の柱として学習者は社会的存在であることを説明している。詳細に関しては4節で記す。

<sup>5)</sup> 近年では、さらに「NNSが日本社会に適応するために日本語を学習する」という観点から、「NSのことばのあり方をも含め、多文化共生のために日本語教育はどうあるべきか」という観点への変化もある(稲垣・細川・金・杉本, 2022)。また、NSとNNSが共に日本語を学ぶことが多文化共生に結び付くという主張も見られる(青山・明石・李, 梁, 2020)。

<sup>6)</sup> スピーチレベルやアップシフト、ダウンシフト、丁寧体/普通体などの呼び方は様々だが、宮武(2009)に簡潔に整理されている。本稿では、スピーチレベルおよびアップシフト、ダウンシフト、最丁寧体、丁寧体および普通体という名称を採用することとする。また、スピーチレベルに関しては文末のスピーチレベルを対象としたい。

を動的に捉える必要があると指摘し、その会話参加の対称性と非対称性を「参加者による局所的 (local) なレベルでの連鎖が織り成す全体的 (global) な様相」と定義した (岩田 2005:137)。同様に岩田 (2007) は、Linell & Luckmann (1991) の非対称性の定義を引用し、留学生 NNS と日本人学生 NS の接触場面の会話参加の様相を考察した。

会話参加の様相に着目した岩田 (2005) に対し、西條 (2005:166) は会話参加者間の関係性の非対称性に着目し、その定義を「言語によって再構成され、顕在化した関係の非対称性を言語的非対称性」だと述べている。会話における非対称性の分析に関しては Linell & Luckmann (1991) の非対称性の定義を踏まえ、会話には様々なレベルの非対称性が存在することから、発話連鎖のパターンだけでは非対称性を分析できないと主張し、どのような会話がより対称的/非対称的かという観点ではなく、むしろ、言語的非対称性が会話参加者によってどのように管理されているかを論じた。

接触場面の話題導入および展開を分析した嶋原 (2019) は、会話における非対称性の定義については述べていないが、Linell (1990) および Linell & Luckmann (1991) を参考に、ある会話が対称的か非対称的かを判断するのは困難ではあるものの、会話参加者の参加の形式を分析するときそれが対称的かどうかという観点は参考になることを示している。さらに、会話参加者が友好的な関係構築を望む場合は対称的である方が望ましいと主張している。

以上、会話における非対称性という用語の定義に関しての論考を概観した。対話における非対称性という概念を論じた Linell & Luckmann (1991) と Linell (1990) では、会話参加者の発話における非対称性、すなわち話題選択や発話量などと、発話における会話参加者の関係性における非対称性が、談話内のローカルとグローバルの両方に存在すると考えられていた。このように、会話における非対称性は様々な次元に存在するとされているにもかかわらず、接触場面の先行研究では、会話参加の様相や会話参加者間の関係性、また話題選択と会話参加者間の関係性という限られた次元を対象とし、分析、考察していた。こうした点で、Linell & Luckmann (1991) と Linell (1990) の非対称性に関する考え方の相違がある。先行研究の取る立場を考慮すると単純に比較できないと思われるが、それでも、Linell & Luckmann (1991) と Linell (1990) が指摘したように、接触場面における非対称性を考える際、発話そのものの次元と、その発話から生じる会話参加者の関係性などの様々な次元を総合的に分析する必要があるだろう。そこで次項では、会話の様々な次元に着目した非対称性研究を整理していく。

## 3.2 会話の様々な次元に着目した非対称性研究

接触場面の非対称性は、会話の様々な次元に観察できると仮定すると、まず発話においては、大きく2つの次元、すなわち発話そのものに関して、発話内容<sup>7)</sup>と言語形式の次元が考えられる。そして、それらの次元から生じる会話参加者の関係性などの次元も想定できそうである。ここでは、まず発話内容の次元に関する非対称性、次に言語形式の次元の研究を検討する。

### 3.2.1 発話内容の次元の研究

ここでは、発話そのものの次元に着目した先行研究のうち、主に発話内容を論じた研究を見ていく。発話内容の次元には、まず、大きく話題に関する研究群つまり話題導入・転換、情報交換の形態とパターンなどに関するものがあり、次に、会話参加者の役割に関する研究群つまり会話分析の成員カテゴリー化、言語に関するホストやゲスト役割などに関するものに分けられる。最後に、上記以外の次元に着目した研究を取り上げる。

はじめに、接触場面において、会話参加者が「何を話すか」、つまりどのような話題を導入し、情報交換をどのように行うのかということは、学習者に対する会話の教授方法を探る必要性から、特に日本語教育分野で注目されてきた。そうした話題に関する研究として、嶋原 (2019)、佐藤・夏・中井 (2022)、西條 (2005)、岩田 (2007) が挙げられる。

嶋原 (2019) は、NS と NNS が協働する方法をどのように学習するのかを探るため、大学生同士の初対面二者雑談の話題導入と転換に関し、会話参加者の接触経験の量の相違に着目して、会話の参加形式および社会カテゴリーの観点から論じた。分析の結果、話題導入に関しては、接触経験の多い NS が国事情と言語に関する話題を自らの興味や NNS への配慮として導入し、一方、NNS は接触経験の少ない者がそうした話題を導入していた。また、接触経験の多い NNS は、NS と共通すると思われる大学生活に関する話題の導入を行っていた。話題転換に関しては、NS は協働的に転換し、他方、接触経験の多い NNS は一方的転換が多く、また接触経験が少ない NNS は突発的転換が多かった。さらに、話題展開における会話参加形式を検討した結果、接触経験の少ない NS が接触経験の少ない NNS に質問をし続けるという非対称形式が観察され、一方、接触経験の多い NS と接触経験の多い NNS ペアでは、両者が話し手となる形式が多かったと報告した。嶋原 (2019) はこの結果について、非対称な参加形式が続くだけでは話者間の距離が縮まらないと推測し、双方向の自己開示が行われる対称的参加が重要だと提案している。非対称な参加形式の要因としては、相手の意見を引き出すことや相手をその話題に巻き込むことができないことが要因だという見解を示している。

<sup>7)</sup> 発話の分析では、言語面と非言語面から行うことが望ましいと思われるが、本稿では言語面のみを取り扱うこととする。

ここまで二国会話を検討した研究を見てきたが、二国会話と三国会話を取り上げ比較した研究に佐藤・夏・中井(2022)がある。この研究は、NSとNNSの参加調整の様相を明らかにするため、日中初対面接触場面の二国会話と三国会話を比較分析した。話題導入の発話機能と展開の仕方、また話題導入者と話題保持者という観点から、双方の歩み寄りの姿勢と参加調整ストラテジーを考察した。その結果、二国会話ではNSとNNSの両方が参加調整を行ったため、NNSの参加と理解度が高かった。一方、三国会話では、NSが参加調整をあまり行わない様子が観察され、NNSの参加と理解度が低くなる話題もあったと述べている。これらのことから、佐藤・夏・中井(2022)は、二国会話だけでなく三国会話でもNSとNNSの参加調整が必要だと主張している。

このような参加者相互の調整ストラテジーに関する研究に西條(2005)がある。西條(2005)は、会話参加者間の非対称的関係が話題の局所に出現した場合、どのように解消するかに着目した。母語場面と接触場面の話題導入と終了箇所であるエピソード境界における会話参加者の発話を分類し、発話の局所あるいは全体との関係(発話因子)および言語形式(情報単位)、場面ごとの出現頻度を分析した。その結果、接触場面ではNSとNNSが先行発話へ応答しつつ発話の反復を行い、「提題表現」、「文末叙述表現」、「応答表現」によって境界が形成されていた。そうした傾向は母語場面より接触場面において顕著であり、西條(2005)は、NSとNNS間の言語的非対称性を克服するためのストラテジーだという見方をしている。

局所の発話連鎖を分析単位とした西條(2005)に対し、話し手がフロアを取り話者交代するまでの発話、つまりターンにおける発話連鎖に着目し、NSとNNSのやり取りの形式であるイニシアチブ・レスポンス分析(以下、IR分析)を行った研究として、岩田(2007)が挙げられる。岩田(2007)は、会話参加の特徴を探る目的で、大学生友人同士のNSとNNSの二者雑談をIR分析および局所の質的分析を行った。その結果、やり取り形式が一致した対称的参加が二組、やり取り形式が不一致であった非対称的参加が三組確認された。そして、非対称なやり取りでは情報提供が一方から行われ、共通点を用いての話題展開がみられなかったとしている。岩田(2007)は、対称的参加のためには情報提供が双方から行われることが重要だと指摘している。

以上、話題導入と展開に関する研究を概観した結果、接触経験の量や話題導入者とその発話機能、話題展開の仕方、また話題保持者などに関して分析されていた。そして会話の局所か全体のいずれかを対象とした研究が多く、その両方を分析したものは少なかった。分析結果を見ると、NSが話題を導入し積極的に展開するのに対し、NNSも話題導入や転換を行うものの、円滑な展開は難しいという見解が示されていた。これらの研究が対象とするNNSの日本語レベルは上級であるが、それでもなおNSとNNSの話題への参加

のあり方が非対称になりやすいと捉えられ、対称的参加が求められていることがわかった。それらが重要な指摘であることを何ら否定するものではないが、会話参加のあり方総体における対称性/非対称性を考えるとしたら、会話の話題とはいくつかあり得る焦点の1つという位置付けになるのではないだろうか。そうした課題は4節で論じる。

続いて、会話参加者の役割に関する研究群を取り上げる。会話参加のあり方の非対称性に関し、会話参加者間の関係性の観点から会話分析の分野におけるSacks(1972)の「成員カテゴリー化装置」の概念を援用し、会話参加者の社会的属性に関して分析が行われてきた。ここではまず、西阪(1997)、杉原(2003)、森本(2009)を順に検討する。

代表的な研究として、西阪(1997)が挙げられる。西阪(1997)は、ラジオ番組の留学生と日本人アナウンサーの会話分析で、人が自分を「何者か」と考えたときに当てはまるカテゴリーである「アイデンティティ・カテゴリー」という概念を検討した。その結果、会話参加者が「日本語の所有権」という、日本人が外国人の話す日本語の言語能力を評価する資格をもっている、という期待に基づき、「日本人/外国人」というカテゴリー化を相互行為で行い、非対称的関係が構築されると指摘している。つまり、NSがNNSに日本語や日本文化について聞く、またNSがNNSの発話を解釈する等の行為により「日本人/外国人」というカテゴリー化が顕在化することとなり、その結果として両者が非対称的関係を構築していると主張している。さらに、NSはNNSの発話を言い換える行為によって「日本事情にかかわる知識の所有権」を主張し、両者が非対称的関係を具現していくと述べている。

西阪(1997)の「日本語の所有権」に対し、杉原(2003)は、地域日本語教室の話し合い場面会話を分析し、「日本語=日本人が所有している」という前提での「日本語の説明」が「日本人/外国人」カテゴリーを顕在化する要因となることを推察している。そして「日本語の説明」が結果的にカテゴリー化維持の役割を果たすとしている。なお、カテゴリー化が現れる契機に会話参加者の質問が関与すると述べ、無意識のうちに会話相手をカテゴリー化し、カテゴリーの代表的立場のようにしてしまう危険性を指摘している。

続いて、NSの会話を対象に調査を行った森本(2009)がある。この研究は、地域日本語教室のボランティア会議におけるNSの語りに現れるカテゴリー化に焦点を当て、調査を行った。その結果、ボランティアのNSは語りの上では「NS=先生」というカテゴリー化を否定している一方で、無意識的に「NS=先生/NNS=生徒」という非対称なカテゴリー化を行っていた。これに対し森本(2009)は、NSがこうしたカテゴリー化を通して無意識のうちに「先生」としてのアイデンティティ確立を実践していると述べている。さらにこうした非対称的関係は固定的であり、NSとNNS双方が相互的に構築していると主張している。

ここまで、社会的属性のカテゴリー化に関する先行研究

を見てきた。続いて、会話参加者の言語的役割に焦点を当て、NSとNNSが言語的対称性を実現するかという目的で、両者が相互行為において果たす役割を論じた研究を取り上げる(杉原 2006, 大津 2016)。

杉原(2006)は、大学生NSとNNSのグループ議論について非対称性と権力作用に注目し、会話分析を行った。その結果、NSとNNSの相互行為にNSが議論を主導するという非対称性がみられた。この結果に関し杉原(2006)は、NSとNNS間の非対称性は日本語母語話者/非母語話者というカテゴリー化の実践と結びついており、母語話者であるNSの思考の枠組みや展開が優先され両者の非対称的關係が作られると述べている。

一方、NSとNNSの非対称性を解消するために、会話で「日本語母語話者/非母語話者」や「教える側/教わる側」というカテゴリー化を避ける事例研究もある(大津 2016)。大津(2016)は大学生友人同士の雑談を検討した。結果、NSはNNSへの理解確認において「～って分かる」、「～知ってる?」という質問形式をなるべく避け、友人同士の雑談をしていた。このことについて大津(2016)は、NSは非対称的な「教える側/教わる側」というカテゴリー化を避け、「友人同士」という対等なカテゴリー化を選択したと説明している。このように、会話参加者が共通のカテゴリー化を指向することにより、対称的關係の構築につながる可能性も主張されている。

これらの研究の他、会話参加者の言語的役割を検討した研究に、ファン(2003)がある。ファン(2003)は、接触場面において自分の言語を使用する母語話者が相互理解を確立する責任があることを当然と思い会話を管理する一方、非母語話者が言語的に会話を管理されるという「言語ホスト/ゲスト」という考え方を述べた。さらに、その「言語ホスト/ゲスト」は場所によって相違があるという「場所ホスト/ゲスト(加藤 2010)」という概念も提唱されている。これらの概念は、NSとNNSの役割性に関する認識であり、両者の「言語ホスト/ゲスト」としての役割認識が要因となり、会話において非対称性が存在するということ自体を問題としていないように思われる。

以上、会話参加者の役割に関する研究群を見てきた。これらの研究では、会話参加者の社会的属性をカテゴリー化から捉えるものと、言語的役割からカテゴリー化するものがあった。カテゴリー化の結果、会話において非対称性が現れるため、NSとNNS間に非対称的關係が構築されるという見解が示されていた。そして、これらの先行研究では、NS、NNS共に、日本語と日本に関する知識を、当然のように母語話者であるNSの方がNNSよりも持ち合わせているものと位置づけし、それに基づいて会話参加者のカテゴリー化を行った結果、「日本人/外国人」という非

対称的な關係性が前景化、維持されると主張されている。しかし、実際にはNSの方がNNSより日本に対して多くのことを知っているとも限らないことに鑑みると、西阪(1997)の指摘のように、「日本人」や「母語話者」であることは会話において両者の相互行為により顕在化され、そうしたカテゴリー化自体を実践するというよりも、むしろ母語話者と非母語話者というカテゴリー化を指向したふるまいによって非対称性が前景化するのではないだろうか。串田・平本・林(2017:283)も、会話参加者が持っているべきだと規範的に期待される知識の配分(その対称性や非対称性)に指向してふるまうことは、広く観察される現象だと指摘している。よって、NSとNNSの発話におけるカテゴリー化だけを分析するのではなく、発話においてNSとNNSがどのようにふるまうのかを、スピーチレベルやスピーチレベル・シフトなどの次元も含め複合的に検討する必要があると思われる。同時に、発話そのものの次元と、発話から生じるNSとNNSの關係性について分けて論じることが求められる。これについては、4節で述べる。

最後にその他の次元に着目した最新の研究に、多人数話し合い活動において会話参加者間が対等に参加することを目指し、言語的非対称性の変容を分析した研究(平田・杜・村上 2024)がある。地域住民のNSとNNSが話し合いに参加し、その活動で伝達補助道具として感情カードを使用した。そのことで、それまで会話に参加できなかったNNSの主体的会話参加がみられ、一方、NSも言語的調整を行うことが観察されたとしている。この研究は発話そのものを対象とはしていないものの、接触場面でNSとNNSの会話への参加が非対称から対称的なあり方へと転換した例と言えそうなので、注目に値すると思われる。

ここまで、発話内容の次元の研究を検討した。先行研究では、話題導入と展開、会話参加者の役割などに着目して分析していた。その際、量と質の両面を捉えた研究もあったが、同様に、言葉の内容と形式の両面に目を向けることも必要であるように思われる。それは、会話参加者間の総体的な關係性や局所的な話題選択などによる主導権など諸要因の複合的な結果として、スピーチレベルなど言語形式の選択が決定されると考えられるからであり、それゆえ非対称性についても、会話の局所と全体における内容と形式の両次元から総体的に論じていくことが望まれるからである。そこで、次項では発話そのものにおける言語形式の次元の研究を取り上げる。

### 3.2.2 言語形式の次元の研究

ここでは、発話そのものの次元に着目した先行研究のうち、言語形式を焦点化した研究を記す。

はじめに、言語形式<sup>8)</sup>の非対称性に着目した先行研究と

<sup>8)</sup> 発話の言語形式には、スピーチレベルの他にあいづちなどもあるだろう。しかし、接触場面のあいづちに関する研究では、研究の目的が日本語学習者のNNSの特徴を調査するものが多いと思われるので、本稿では対象としない。

して、会話におけるスピーチレベルおよびスピーチレベル・シフトに関する研究がある。対象者別に、NSを対象とした研究（伊集院 2004）、NNSを対象とした研究（Ohri 2003）、NSとNNSを対象とした研究（篠崎 2012）を順に記す。続いて、発話そのものを対象とはしていないが、接触場面のスピーチレベルとスピーチレベル・シフトに関する質問紙調査を実施した研究（金 2022）を取り上げ参考とする。

まず、NSを対象とした研究として、伊集院（2004）を見ていく。伊集院（2004）は、NSの文末スピーチレベルの場面による使い分けを探るため、母語場面および接触場面（中国と台湾出身のNNS、日本語レベル上級学習者）において、文末スピーチレベルの分析とフォローアップ・インタビューを行った。いずれも初対面二者雑談が対象であった。NSの丁寧体、普通体、中途終了型など計7種類の文末スピーチレベル出現率と会話の時間軸における推移、さらにスピーチレベル・シフトの要因について分析した結果、NSは場面に応じて質的に異なる言語行動を取っていた。母語場面では会話の進行に伴い、丁寧体から徐々に普通体にダウンシフトしたのに対し、接触場面では急速に丁寧体から普通体にダウンシフトする事例や、会話の冒頭から最後までほとんど普通体を使用する事例が見られたと述べている。伊集院（2004）は、母語場面と接触場面の相違について、NSが母語場面において「日本の初対面会話では失礼にならないように丁寧体で話す」という“規範”を意識するためだと考察している。一方、接触場面ではこうした意識が薄れ、NSはNNSに対するステレオタイプの考えである、「留学生は敬語が難しく、普通体で話す」という印象を抱くことから普通体で話すことと推察している。よってNSは、たとえ上級の日本語学習者相手であっても、母語話者同士とは異なるメカニズムでスピーチレベルを選択していると結論づけている。

伊集院（2004）の研究目的はNSのスピーチレベル・シフト要因を明らかにすることであったため、挙げられているデータを見ていくと、論文には記されていないが非対称性に関して言えることがあると思われる。そこで、この論文のデータの再解釈を試みたい。NSとNNSのスピーチレベル・シフトの推移を見ると、母語場面では、会話終了時において会話参加者同士のスピーチレベルが近づき対称となるのに対し、一方、接触場面では、会話参加者のスピーチレベルが非対称となっている。つまり、接触場面の全8会話のうち6会話で終了時にNSが普通体、NNSが丁寧体となっている。NSが丁寧体、NNSが普通体というものが1会話あるものの、会話の進行に伴ってNSのスピーチレベルが急速に普通体にダウンシフトし、最終的にはNSとNNSのスピーチレベルが非対称となるという傾向は注目に値す

るだろう。このように、NSは接触場面において母語場面とは異なる方法でスピーチレベル・シフトを行うと考えられ、その結果、会話の進行に伴って、NSが普通体、他方NNSが丁寧体という非対称的なスピーチレベルになりやすいと解釈できるのではないだろうか。

このようなNSのスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの様相に対し、NNSのそれらの様相を論じた研究にOhri（2003）がある。Ohri（2003）は、地域日本語教室のNSとNNS（イラン・中国・フィリピン出身の日本語レベル上級学習者）の多人数会話において、NNSの会話における基本的なスピーチレベルとアップシフト要因およびその機能を調査した。その結果、NNSのアップシフトは話題提起時の改まりと、会話相手であるNSとの心的距離を縮める時、またNSがNNSの日本語を評価した時や、NSがNNSの行動を評価しNNSがそれに対して感謝を表す時、そして日本語と日本文化についての質問時にも観察されたと報告している。なお、従来、NSが行うアップシフトは、会話相手との心的距離を伸展させる手段であると言われているが、この調査で観察されたNNSのアップシフトは、NSに対する親しみや共感を表すコミュニケーション・ストラテジーという面があり、NSとは真逆の結果だと解釈されている。Ohri（2003）は、NNSのスピーチレベル・シフトの一要因として、NSとNNS間に日本語と日本文化に関する知識の相違による「力関係<sup>9)</sup>」があるためと推測し、両者がそのような「力関係」を協働で構築していると主張している。

この結果から、接触場面のNNSのスピーチレベル・シフトではNNS特有のスピーチレベル選択が行われると考えられる。NNSはNSに対し丁寧であろうとし、日本語と日本文化に関する知識の相違による「力関係」の存在によってNSに対し感謝表示を行うという傾向から、言語面だけでなく心理面でもNSに対し何らかの調整をしているとの見方がされている。会話における非対称性に関しては、NSとNNSの間に存在すると考えられている日本語に関する知識が非対称だと捉えられており、その知識差が両者の非対称的関係につながっていると主張されている。しかし、NNSの中には日本在住が長く、日本語レベルも上級から超級という者もいるだろうと考えれば、NSとNNSの日本語に関する知識差そのものが真の要因と見なせるかどうかについては、留保も必要であるように思われる。さらに、Ohri（2003）の分析結果で、NNSのアップシフトはNSとの心的距離を縮める時にも観察されることが示されている。これは「力関係」が要因で起こるアップシフトとは性質が異なるのではないだろうか。三牧（2007）は、談話でスピーチレベルに対しての意識を持続し、適切にスピーチレベルを使いこなすのはNNSには総じて困難な問

<sup>9)</sup> Ohri（2003）は、この「力関係」は権力関係という意味合いではなく知識などの差から発生する関係性だとしている。

題だと指摘している。さらには、この研究のNNSは日本に長く定住し、日本語を自然習得しているので、主に教室環境で日本語を習得する留学生のスピーチレベル運用とは相違があるかもしれない。とはいえ、NNSのスピーチレベル・シフト要因がNSのそれとは異なるということを明らかにした点は、意義あることではないだろうか。

続いて、NSとNNSの双方を対象とした研究として、篠崎(2012)を検討する。篠崎(2012)は、母語場面と接触場面の初対面二者会話を対象とし、同一ペアによる継続した4回の会話の縦断的分析とフォローアップ・インタビューを行った。会話におけるスピーチレベル・シフトの出現率とその推移、普通体2種類の出現率を調査した結果、NSは、母語場面では会話相手と対称的なスピーチレベルを選択するのにに対し、接触場面ではNSが普通体、他方NNSが丁寧体を基本とした非対称的なスピーチレベルが現れたとしている。さらに、NSは2回目の会話から急激に普通体にダウンシフトし、一方、NNSは会話において丁寧体が基本的なスピーチレベルではあるものの、それらが不明確な状況で出現した。またスピーチレベルの出現比率に関して、全体的には普通体の比率が低い。しかし、Cook(2008)の分類(informal/impersonal)を当てはめると、NNSの普通体発話は独り言や感嘆などの表出ではなく、聞き手を直に指向する発話、つまり聞き手目当ての発話で多く出現していた。このことから篠崎(2012)は、NNSは普通体比率が低いにもかかわらず、NSがNNSの話し方について「押しが強い」と感じていた要因となっていると指摘している。

この分析結果から、NSは母語場面では対称的、他方、接触場面では自身だけが普通体という非対称的なスピーチレベルとなる傾向が述べられている。他方、NNSは、丁寧体が基本選択とされる傾向ではあるものの、何らかの要因で普通体も出現することもあり、会話において丁寧体と普通体が混在しやすく、NNS特有のスピーチレベル選択が行われると整理できる。また日本語レベル上級学習者を対象にしていることを考慮すると、たとえ上級学習者であっても、会話でNNS特有の中間言語的なスピーチレベル選択が行われる可能性が考えられる。以上から、接触場面のNSは普通体、一方、NNSはスピーチレベルが不安定ながらも丁寧体が基本という非対称的構図が示されているだろう。

最後に、接触場面会話そのものを対象とはしていないが、スピーチレベルに関してNSとNNSの双方を対象とした質問紙調査を行った研究として、金(2022)を見ていく。金(2022)は初対面会話におけるスピーチレベル・シフトを探るため、NSと韓国人NNSに質問紙調査を行った。スピーチレベル・シフトの傾向と会話相手のスピーチレベルに対する意識に関し尋ねた結果、NSのスピーチレベル・シフトでは母語場面とは異なり丁寧体を多く選択しようとし、他方NNSは丁寧体の選択が多く、また敬語の使用率も高いと答えていた。普通体使用に関しては、NS

は、NNSには敬語が難しいという認識から、会話途中から普通体にダウンシフトする傾向があり、一方NNSは、会話相手との心的距離の調節やNSの普通体使用に合わせるため、普通体にダウンシフトすると答えていた。会話相手の普通体使用への意識では、NSはNNSが普通体を使用した場合“言語的な気配り”からNNSの日本語レベルを理解しようとし、一方NNSは自身が外国人であることを理由にNSが普通体を使用した場合、失礼、無礼などの否定的評価を行っていた。以上から、金(2022)はNSのスピーチレベル・シフトの意図とそれに対するNNSの解釈に相違があると指摘し、NSの韓国人NNSに対しての普通体使用が誤解の要因となり得ると述べている。つまり、韓国人NNSは韓国語初対面場面においては必ず丁寧体を使用するという社会的規範への認識があり、初対面のNSが韓国人NNSに対し、“気遣い”から普通体で話すことを否定的に捉えるということである。

金(2022)の分析結果を見ると、日本と韓国は双方に敬語があり、それぞれの話者における普通体使用の仕方が異なっているため、異文化間の摩擦につながるということだろう。また、NSは丁寧体を基本としつつもNNSには敬語が難しいという解釈から、会話途中から普通体にダウンシフトするのにに対し、NNSは丁寧体が基本であり敬語も使用すると回答していることから、両者のスピーチレベルが非対称となる可能性が示されている。しかし、回答者が規範的な回答をする可能性や、実際の言語行動との差も想定されるため、実際の会話におけるスピーチレベル・シフトの様相が明らかになったとは言い難いと考えられる。

以上、会話におけるスピーチレベルとスピーチレベル・シフトの研究においては、会話の全体や部分におけるスピーチレベルの出現率やスピーチレベル・シフトの変遷と要因、またNSとNNSのスピーチレベル・シフトを行う時の会話参加者の意識面の推測が行われてきた。その際、会話データの分析に加えてフォローアップ・インタビューや、質問紙調査を行う研究もあった(伊集院2004、篠崎2012、金2022)。しかし、1つの会話内でNSとNNSの双方のスピーチレベルが発話の経過でどのように変動し、また発話内容とスピーチレベル・シフトがどのように関わり合うかは明らかにされていない。さらに、これらの先行研究は主に初対面会話が対象であり、友人同士会話を検討したものは管見の限り少ない。分析結果に目を向けると、NSのスピーチレベル・シフトは接触場面で会話の進行に伴い急激にダウンシフトさせていると言われ、それに対し、NNSのほうは丁寧体を基本としつつも不安定な運用をつつ、スピーチレベル・シフトをコミュニケーション・ストラテジーとして用いることが報告されていた。その結果、会話の言語形式の次元で非対称となると主張されていた。しかし、スピーチレベルは会話参加者間の会話における関係性だけを反映するものではなく、会話参加者の社会的規範への認識なども現れるという考え方もある。さらには、発話内容との関わり合いも考えることが求められる。

したがって、談話レベルでのNSとNNS両者の言語形式であるスピーチレベルの変動と発話内容との関係性、さらに会話参加者間との関係性を考慮した会話の分析も行う必要がある。

こうした観点を考慮し、会話参加者の会話参加のあり方を多面的に捉えようとする試みに藤平 (2022) がある。藤平 (2022) は、日台接触場面の初対面と友人同士の二者雑談2事例に関し、NSとNNSの会話の進行に伴うスピーチレベル・シフトと発話内容の関係性を分析、考察した。その結果、NSとNNSが文末スピーチレベルと発話内容を変動させ、相互行為で非対称的關係を構築していたと主張している。限られた事例についての分析ではあるものの、接触場面における非対称性について、表現内容と言語形式とを関連付けて考察する方法論を提案した点では、一定の意義があると言えるのではないかと考える。

## 4. 接触場面の非対称性の議論

### 4.1 先行研究の評価の結果、残された課題

これまでに接触場面の非対称性が会話の様々な次元に存在すると仮定し、主に発話内容と言語形式の次元に関する先行研究を概観してきたが、ここでその内容を再確認したい。まず、会話における非対称性に関する代表的研究に Linell & Luckmann (1991) があるが、それ以降の接触場面研究では「非対称性」という用語の定義が一定ではなく、それぞれの研究が取る研究の立場や目的も異なっていた。また、会話の局所と全体の双方を見る視点および発話そのものの次元と、その発話から生じる会話参加者の関係性などの様々な次元を総体的に分析するという課題が残された。

次に発話内容の次元に関しては、会話の局所、全体のいずれかを対象とした研究が多く、両方を分析したものは少なかった。また、発話内容の次元だけの分析にとどまり、発話内容と言語形式がどのように関わって会話が行われるかについての考察が不足しているように思われた。それから、発話そのものの次元と、発話の相互作用によって構築される関係性の次元をも分析する枠組みを考える必要があった。

最後に、言語形式の次元に関しては、発話内容と言語形式の会話内での変動および関わり合いは検討されていなかった。データに関しては、初対面会話がほとんどであり友人同士会話が少なく、会話参加者の親疎関係による相違などを考えるための材料不足という状態が改善されていなかった。

以上の検討を通じて、接触場面の非対称性研究になお求められるものが浮かび上がってきたように思われるので、以下に掲げる。

- a. 接触場面の「会話における非対称性」という用語の明確な定義
- b. 「会話に関する非対称性」をさまざまな次元、また局所

と全体から総体的に分析する方法

- c. 1つの会話の進行に伴う発話内容と言語形式の関わり合いという視点
- d. 発話そのものの次元と、発話から生じる会話参加者の関係性の次元を検討する方法論
- e. 会話参加者が会話を行う前提条件となる社会的属性や親疎関係、社会規範などの会話参加者間との関係性および社会規範という視点

これらを考える前に、ここで、仮に接触場面のNSとNNSの1事例を想定して上記の課題点を考慮する必要性を再確認し、続いて会話に関する非対称性の分析方法を論じる。

例えば、接触場面のNSとNNSの会話事例として、NNSが、話題導入や転換を会話の局所と全体において質問を積極的に行いながら、会話の基本的な文末スピーチレベルは丁寧体を使用し、それに対しNSは話題での発話量が多いながらも、話題導入や転換はほとんどなくNNSからの質問に応じ、普通体で発話するとする。そういった事例では、両者の会話参加のあり方や会話における関係性は非対称なのだろうか。もし、発話内容の次元を分析した場合は、発話の主導権に関してはNNSが話題導入と展開を行っていることから、両者の会話参加のあり方にNNS優位の非対称性がみられ、他方、言語形式の次元を分析したとすると、NSが普通体、NNSが丁寧体というNS優位の非対称性がそこに存在することとなる。三牧 (2013:209-214) もこのような事例を挙げ、会話参加者の社会的属性に上下関係がある会話で、下位者の話題導入頻度が高く、会話の主導権を取っている一方で、スピーチレベルに関しては丁寧体で上位者へのわきまえを表示していることを報告している。このことから、ある会話に関して会話参加のあり方が対称か非対称かを一義的に明らかにすることは難しいが、言語形式のスピーチレベルおよびスピーチレベル・シフトと、発話内容である話題選択、転換、主導権等において非対称性が存在するかということと、さらにそれらの非対称性がローカル (局所) / グローバル (全体) において存在するかという少なくとも2点を考えねばならないことが確認できよう。

### 4.2 「会話に関する非対称性」の分析の枠組みの考察

そこで、前述した課題に対しての筆者の認識を提示していきたい。先行研究では、まず、会話参加者が会話をする際の前提条件となる社会的属性や親疎関係、ウチとソト、さらに社会規範などの「会話参加者間との関係性および社会規範」、次に、会話そのものの次元で「会話参加者の会話参加のあり方の対称性/非対称性」、そして、会話から伝達される次元の「メタメッセージ」、最後に「会話で構築される会話参加者間との関係」の4点が明確にされていなかった。

まず、会話参加者が会話を行う際の前提条件として、会話参加者の関係性や社会規範などが挙げられる。つまり、



年齢、階層、ジェンダー等の社会的属性、親疎関係やウチとソトという考え方、またスピーチレベル選択の要因となると言われている社会規範と個人的なピリーフ（伊集院2004）やアイデンティティ指標（井出2006）もある。そうした前提条件のもとで会話が行われる。そして、会話そのものの次元と会話から伝達されるメタメッセージの次元に区別できるだろう。会話そのものの次元には会話参加者の「会話参加のあり方の対称性/非対称性」が現れる。これには、言語と非言語行動があり、またそれぞれについて、会話のどの部分を分析するか、すなわち会話のミクロレベル（局所）およびマクロレベル（全体）の2つの部分と考えられる。そして、発話の具体的な面として、言語形式（スピーチレベル・シフトなど）と発話内容（成員カテゴリー化、話題選択、情報交換の形態、主導権など）があり、会話参加者の会話参加のあり方を反映していると仮定できそうである。

次に、その会話から伝達されるメタメッセージの次元が想定される。熊取谷（1994:231）によると、メタメッセージとは「発話の命題内容がどのような意図の元で発せられたかを伝達するメッセージ」である。さらに熊取谷（1994:231-232）は、メタメッセージに「発話行為遂行意図に関わるメタメッセージ」と「言語使用状況特定化のメタメッセージ」の2つがあり、さらにこの後者には、発話者が聞き手との関係をどのように認知しているかを伝える「対人関係規定のメタメッセージ」および発話場面がどのような性質のものかを規定する「状況規定のメタメッセージ」があるとしている。NSとNNSの会話における関係性を考える際は、これらのメタメッセージのうち発話の「対人関係規定のメタメッセージ」を考慮することになる。最終的に、構築される会話参加者間の関係に関し対称であるか非対称であるかは、会話のメタメッセージによって示唆される関係だと考えられ、その関係は会話で交渉され、相互行為によって動的に変化すると思われる。そして、会話のミクロレベルで観察される関係（局所）とマクロレベル（全体）での関係が導き出せる。以上を整理すると、下の図1のように示せるだろう。

以上のような仮定から、接触場面会話に関する非対称性の分析の枠組みは説明されると思われる。では、接触場面の「会話における非対称性」という用語の明確な定義はど

のように規定されるだろうか。本稿では仮に以上での議論を踏まえ、図1で「会話に関する次元」として立てた4つの次元と呼応するものとして、

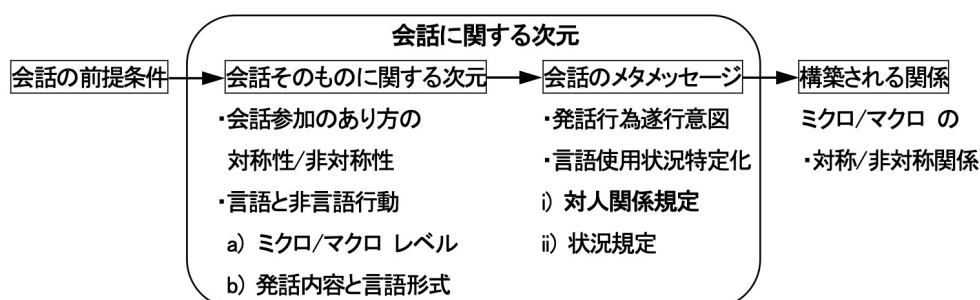
会話の前提条件、会話そのものに関する次元、会話のメタメッセージ、構築される関係、の一部ないしは全部において生じ（てい）る会話参加者間の不均衡のことと置いてみたい。もちろん、研究を行う際の立場や研究目的の相違によっても用語の定義や使い方は異なるため、今後も分析方法論を含めて様々な検討が必要である。

日本に在住するNNSはますます今後も増加し、NNSとNSの接触場面も増える予想される。多文化共生を考える際、NNSがNSと非対称的關係ではなく、対称的關係で社会参加することが重要である。このNNSの社会参加に関しては、「ヨーロッパ言語共通参照枠（Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment）」（CEFR）を参考に「日本語教育の参照枠報告」（令和3年10月）で掲げられた3つの柱が指針となるだろう（p.6）。つまり、「1 日本語学習者を社会的存在として捉える、2 言語を使って「できること」に注目する、3 多様な日本語使用を尊重する」である。そして、「1 日本語学習者を社会的存在として捉える」において、「学習者は、単に「言語を学ぶ者」ではなく、「新たに学んだ言語を用いて社会に参加し、より良い人生を歩もうとする社会的存在」である。言語の習得は、それ自体が目的ではなく、より深く社会に参加し、より多くの場面で自分らしさを発揮できるようになるための手段である。」と述べられている（p.6）。今後もNNSの社会参加と大きく関わらるだろう接触場面のあり方についての研究が求められている。

## 参考文献

- 青山玲二郎, 明石智子, 李楚成編 梁安玉監 (2020) 『リンガフランカとしての日本語—多言語・多文化共生のために日本語教育を再考する』明石書店  
文化審議会国語分科会 (2021) 「日本語教育の参照枠報告」令和3年10月12日, <[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801\\_01.pdf](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/hokoku/pdf/93476801_01.pdf)> 2024年12月6日最終閲覧

図1 会話に関する非対称性を分析する枠組み



- Cook, H. M. (2008) *Socializing identities through speech style: learners of Japanese as a foreign language*. Buffalo: Multilingual Matters.
- ファン, S. K. (2003) 「日本語の外來性 (foreignness) 第三者言語接触場面における参加者の日本語規範及び規範の管理から」 宮崎里司, ヘレン・マリOTT編『接触場面と日本語教育—ネウストプニーのインパクト—』3-22, 明治書院
- 藤平真由美 (2022) 「接触場面での非対称的關係はいかにして構築されるか?—日本語初対面会話におけるインパクトネスからみる事例分析—」『社会言語科学会第46回大会発表論文集』174-177
- 平田未季, 杜長俊, 村上萌子 (2024) 「話し合いにおける感情カードを用いた傍参加者の参入とそれに伴う参加者の言語行動の変容—日本語母語話者と非母語話者による対等な話し合いを目指して—」『社会言語科学』27(1), 79-94
- 井出祥子 (2006) 『わきまの語用論』大修館書店
- 伊集院郁子 (2004) 「母語話者による場面に応じたスピーチスタイルの使い分け—母語場面と接触場面の相違—」『社会言語科学』6(2), 12-26
- 稲垣みどり, 細川英雄, 金泰明, 杉本篤史編 (2022) 『共生社会のためのことばの教育—自由・幸福・対話・市民性』明石書店
- 岩田夏穂 (2005) 「日本語学習者と母語話者の会話における変化—非対称的参加から対称的参加へ—」『世界の日本語教育』15, 135-151
- 岩田夏穂 (2007) 「留学生と日本人学生の自由会話に見られる参加の対称性と非対称性」『言語文化と日本語教育』33, 1-10
- 加藤好崇 (2010) 『異文化接触場面のインターアクション—日本語母語話者と日本語非母語話者のインターアクション規範—』東海大学出版会
- 金孝珍 (2022) 「接触場面の初対面会話におけるスピーチレベル運用の傾向—タメ口使用とそのタメメッセージに着目して—」『社会言語科学』25(1), 198-213
- 熊取谷哲夫 (1994) 「タメメッセージと母語話者・非母語話者の談話行動」日本研究京都会議配布資料 231-239
- 申田秀也, 平本毅, 林誠 (2017) 『会話分析入門』勁草書房
- Linell, P. (1990) The power of dialogue dynamics. In Marková, I. and Foppa, K. (eds.), *The Dynamics of Dialogue*, 147-177. New York: Harvester Wheatsheaf.
- Linell, P. & Luckmann, T. (1991) Asymmetries in dialogue: some conceptual preliminaries. In Marková, I. and Foppa, K. (eds.), *Asymmetries in Dialogue*, 1-20. New York: Harvester Wheatsheaf.
- 三牧陽子 (2007) 「文体差と日本語教育」『日本語教育』134, 58-68
- 三牧陽子 (2013) 『ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ—』くろしお出版
- 宮武かおり (2009) 「日本語会話のスピーチレベルを扱う研究の概観」『コーパスに基づく言語学教育研究報告』1, 305-322
- 森本郁代 (2009) 「地域日本語教育の批判的再検討—ボランティアの語りに見られるカテゴリー化を通して—」野呂香代子, 山下仁編『新装版「正しさ」への問い 批判的社会言語学の試み』215-247, 三元社
- ネウストプニー, J. V. (1995) 『新しい日本語教育のために』大修館書店
- 西阪仰 (1997) 『相互行為という視点—文化と心の社会学的記述』金子書房
- Ohri, R. (2003) 「定住型非母語話者のスピーチレベルシフト—共生日本語からの一考察—」『言語文化と日本語教育』26, 27-40
- 大津友美 (2016) 「留学生との雑談 第二言語話者との会話における非対称性の克服を目指して」村田和代・井出里咲子編『雑談の美学—言語研究からの再考』167-188, ひつじ書房
- Sacks, H. (1972) An initial investigation of the usability of conversational data for doing sociology. In D. Sudnow (Ed.), *Studies in social interaction*, 31-74. New York: The Free Press. (ハーヴィ・サックス 北澤裕, 西阪仰訳 (1989) 「会話データの利用法: 会話分析始め」『日常性の解剖学: 知と会話』93-174, マルジュ社)
- 西條美紀 (2005) 「接触場面の非対称性を克服する会話管理的方略」『社会言語科学』8(1), 166-180
- 佐藤菜奈花, 夏雨佳, 中井陽子 (2022) 「日中初対面接触場面の二者会話と三者会話に関する事例分析—話題開始の発話とフォローアップ・インタビューから見る非母語話者の理解・参加の比較—」『社会言語科学』24(2), 21-36
- 篠崎佳恵 (2012) 「初対面二者間会話におけるスピーチレベルの変遷とその要因—普通体の指標的意味に着目して—」『桜美林言語教育論叢』8, 15-28
- 嶋原耕一 (2019) 『接触場面への参加による日本語母語話者と非母語話者の変化』立教大学出版会
- 嶋津百代 (2006) 「第二言語話者として生きる—第二言語習得と学習者のアイデンティティ研究—」『大阪大学留学生センター研究論集 多文化社会と留学生交流』10, 51-60
- 杉原由美 (2003) 「地域の多文化間対話活動における参加者のカテゴリー化実践—エスノメソドロジーの視点から—」『世界の日本語教育』13, 1-18
- 杉原由美 (2006) 「留学生・日本人大学生相互学習型活動における共生の実現をめざして 相互行為に現れる非対称性と権力作用の観点から」リテラシーズ研究会編『WEB版リテラシーズ』3(2), 18-27, くろしお出版